『アジア太平洋討究』No. 27（October 2016）

ラブアン―すれ違う戦争メモリアル

早 瀬 晋 三[†]

Labuan:

A Supplement of *A Walk Through War Memories in Southeast Asia*

Shinzo Hayase

This is a supplement of *A Walk Through War Memories in Southeast Asia* published in 2007（Iwanami Shoten in Japanese）and 2010（Metro Manila: New Day Publishers in English）.

There are three war memorials in Labuan Island:（1）Surrender Point,（2）Peace Park, and（3）World War II Memorial. At the Surrender Point "the commander of the 9th Division, Australian Imperial Forces, received the surrender of the 37th Japanese Army in North Borneo" on 10 September 1945. The Peace Park was built as a memorial to peace including an official Japanese war monument "in memory of all those who sacrificed their lives on land and at sea in and around Borneo during World War II and in dedication to world peace." The World War II Memorial consists "Labuan War Cemetery," "The Labuan Memorial," and "Indian Army Plot." The Labuan War Cemetery contains "3,908 burials of which more than half are unidentified." The identified burials number 1,752（"814 British, 858 Australian, 1 New Zealander, 43 Indian and 36 Malayan"）.

In the Peace Park the Japanese do not mention anything on "murders" and atrocities committed by Japanese Imperial Forces like the Api Incident and Sandakan Death March. The anti-Japanese uprising broke out on the night of 9 October 1943 at Api（Jesselton, present-day Kota Kinabalu）. 413 people were arrested and altogether an estimated 4,000 people died in the reprisals. As a commemoration to those who fell a monument engraved was erected in 1979 and the memorial service is held by the government of Sabah. Some 2,400 British and Australian prisoners of war from Singapore's Changi Prison were killed on the "death marches" from Sandakan to Ranau in 1945. They were buried in the Labuan War Cemetery. On the other hand the official website of Labuan Corporation does not mention on the Peace Park built by Japanese in the "Historical Monument" in Labuan City. I discuss this gap.

〈はじめに〉

2007 年に出版した『戦争の記憶を歩く　東南アジアのいま』（岩波書店）は，2003～05 年に東南アジア各国・地域・都市（シンガポール，半島マレーシア，クチン，西カリマンタン，タイ，フィリピン，ミャンマー，プノンペン）でおこなった調査に基づいて書いたものである。これを英訳した *A Walk Through War Memories in Southeast Asia*（Metro Manila: New Day Publishers）を 2010 年に出版し，この英訳版を読んだアテネオ・デ・マニラ大学の学生 51 人の感想，および，2011 年にシンガ

[†]早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

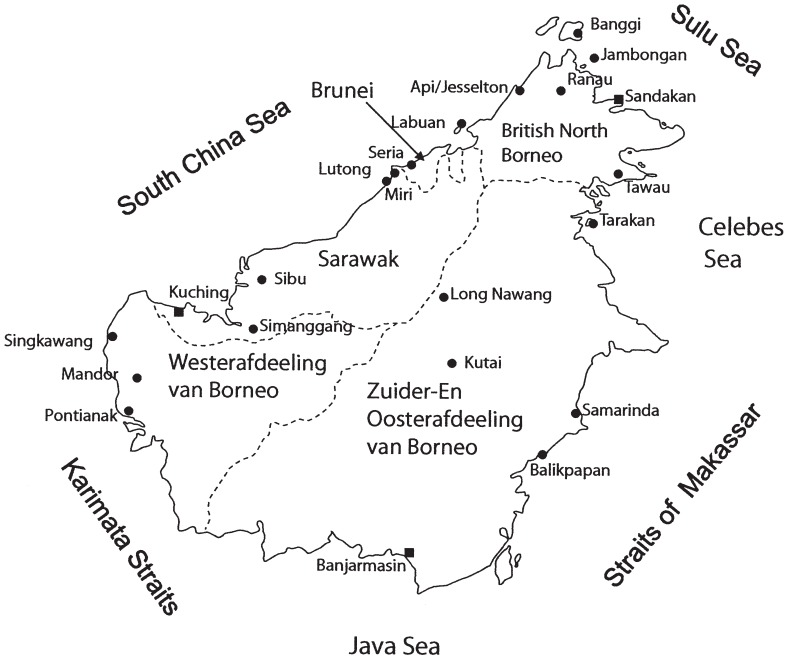
ポールとクアラルンプルでおこなった再調査の成果を加えて，2012 年に「増補版」（第 3 刷）を出版した。

この本の序章で「記念碑は壊されることがあり，博物館の説明文は時代によって変わります」（4 頁）と書いたことが，2011 年の再調査で明らかになった。博物館そのものがなくなったり新たにオープンしたり，展示スペースや内容が大きく変わったりしたものがあった。すでに調査をおこなった国・地域・都市の追跡調査，および，これまで調査する機会がなかった国・地域・都市の調査を新たにおこなう必要から，2015 年度早稲田大学特定課題研究助成費（基礎助成）を申請し認められた（課題番号 2015K-302，24 万円）。本稿は，その成果の一部である。

1. ラブアン島の歴史

ブルネイ湾口に浮かぶラブアン島 Labuan は，真北に香港があり東シナ海・太平洋へ，南西にシンガポールがありインド洋へ，東にスールー海を抜けて太平洋へ出ることができる南シナ海の要衝にあり，シンガポール，香港と並ぶ国際港湾都市になることが期待されたことがあった。その島の重要性を認識したイギリスは，1846 年にブルネイのスルタンと協定を結んで獲得し，48 年に直轄植民地 Crown Colony とした。90 年には，開発を期待して設立された特許会社，イギリス北ボルネオ会社 The British North Borneo Co. の行政下に入った。また，同 90 年にイギリス本国，シンガポール，香港とを結ぶ海底ケーブルが敷設され，1907 年にシンガポール，マラッカ，ペナンからなる海峡植民地 Straits Settlements のシンガポール区に含まれた。

地図 1. 第二次世界大戦以前のボルネオ島



出典：Ooi 2011: 12.

1941 年 12 月 8 日，日本とイギリス，アメリカとの戦争がはじまると，日本陸軍は油田地帯を確保するため，16 日からセリア Seria，ミリ Miri などを占領し，42 年 1 月 1 日にラブアン島に上陸し占領した。ボルネオ島各地の占領がひとまず終了した 4 月 1 日[1] にボルネオ守備隊（当初人員 2,000）が正式に発足し，5 月 5 日の軍司令官前田利為中将のミリ到着と同時に軍政を開始した。ラブアン島は，従来のブルネイの外港，海底無線電信の中継基地に加えて，新たにマニラ，サイゴン，シンガポールとを結ぶ飛行場が建設されてさらなる重要拠点となった。そのラブアン飛行場開場式に出席するため，9 月 5 日にクチンを発った前田軍司令官は墜落事故により「戦死」し，開戦 1 年後の 12 月 9 日ラブアン島は前田島と命名された[2]。

イギリス領ボルネオの軍政（オランダ領ボルネオは海軍「民政」下）は，わずか 800 名ほどの守備隊によっておこなわれ，1943 年 10 月 9 日夜双十節（中華民国の建国記念日）を期して起こったアピ事件当時，アピ Api（イギリス領時代ジェッセルトン Jesselton と呼ばれた現在のサバ州都コタ・キナバル Kota Kinabalu）周辺には数十名が配置されていたにすぎなかった。アピ事件とは，フィリピンからのアメリカ軍による工作活動によって華僑などが反乱し，日本人民間人を含む約 50 名が殺害されたもので，日本軍は首謀者はじめ 413 名を逮捕したほか，討伐隊により数千人が犠牲になったといわれている。サバ州政府は，1979 年に慰霊公園 Petagas War Memorial Garden を整備し，その中央に慰霊碑を建立して，毎年慰霊祭をおこなっている。慰霊碑には「キナバルのレジスタンス活動で殉職した者への献辞」の下に，つぎのような説明が加えられた。「1944 年 1 月 21 日に 176 名がこの地で処刑されており，また，この日以前に Batu Tiga［アピ刑務所の所在地］で 96 名が処刑されたこと，また，1944 年 1 月 21 日以降にラブアン島へ移送された 141 名が餓死した」［上東 2002: 210–11; Ooi 2011: 98–102］。

このアピ事件を境に現地住民の日本人にたいする信頼感・親近感が薄らぐとともに，アメリカによる空襲が頻繁におこなわれるようになった。守備隊は，1944 年 9 月 10 日に作戦軍，南方総軍隷下の第 37 軍，通称「灘兵団」となり，「比島決戦の一環としての防衛作戦準備」にあたった［アジア歴史資料センター C14060063100］。

1944 年 10 月 20 日にフィリピン諸島のレイテ島に上陸したアメリカ軍は，翌年 2 月 3 日にマニラ市に入り，日本軍をルソン島北部山岳地帯などに追い込んで，フィリピン諸島各島を再占領していった。フィリピン作戦終了の目処がたった 1945 年 5 月 1 日，連合軍によるボルネオ作戦がはじまった。タラカン Tarakan につづいて，2 日間の艦砲射撃の後，6 月 10 日にブルネイ，ラブアン島に上陸した。連合軍はブルネイ地区に 20,000 人，ラブアン島に 5,000 人を揚陸させた。迎え撃つ日本軍は，ブルネイ地区 1,000 人余，ラブアン島 500 人余であった。アメリカ海軍の支援を得たオーストラリア軍は，上陸後数日でラブアン島をほぼ制圧し，17 日にブルネイ湾上陸戦は終了した。日本軍は玉砕し，市街地の建物はほぼ破壊された。1945 年 9 月 10 日，軍司令官馬場正郎中将が，ラブアン島の現在「降伏地点 Surrender Point」と呼ばれる場所で，正式に降伏文書に調印した。

ラブアン島は 1946 年 7 月 14 日までイギリス軍政下にあり，翌 15 日に北ボルネオ直轄領の一部になった。63 年 9 月 16 日のマレーシア独立に際し，サバ州の一部となったが，84 年 4 月 16 日にマレーシア連邦政府の直轄地となり，90 年にオフショアー金融センター（租税回避地）international offshore financial centre and free trade zone を宣言した。

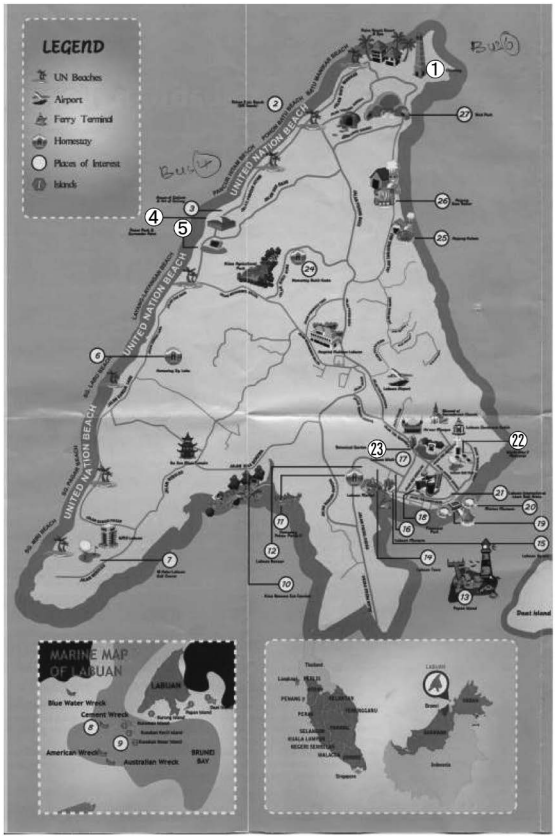
2. ラブアン島の戦争メモリアル

(1) ラブアン博物館

2002 年にオープンしたラブアン博物館 Labuan Museum の常設展示では，1 階で先史時代から現代までを 6 つの時期にわけた歴史，2 階で地域社会を構成する 6 つの民族（Bruneian Malays, Kadaya, Cina, Kadazan-dusun, Indians and Sikh）の移住の歴史，文化的特徴などを紹介し，多民族社会の理解を深めようとしている。1 階の歴史展示では，「ラブアンの日本占領」が破壊された町の様子とともに，つぎのようにマレー語と英語で説明されている。

> 1942 年 1 月 1 日，馬場正郎中将指揮下の日本陸軍第 37 軍がラブアン島に上陸し，北部ボルネオの攻撃を開始した。ラブアンのイギリス理事官 Resident ハンフリーA. H. P. Humphrey は抵抗せず降伏し，1942 年 1 月 3 日にラブアンは日本によって占領された。日本がラブアンを最初に攻撃したのは，戦略上，ボルネオ島のほかの地域を攻撃する基地にするためだった。日本軍は，ただちに長さ 2,093 メートル，幅 27 メートルのサンゴを使った滑走路を建設した。この北部ボルネオで最初に建設された滑走路は，この地域の作戦基地として使われた。また，ラブアンは日本海軍の燃料補給基地となった。

地図 2. ラブアン島の観光地図



① 煙突
④ 平和公園
⑤ 降伏地点
㉒ 第二次世界大戦メモリアル
㉓ 植物園
出 典：“Island & Town Map” Labuan Corporation, Department of Tourism, Culture & Arts, May 2013 Edition.

ラブアンは，ボルネオの軍司令官前田中将にちなんで「前田島 Maedashima」（Maida Island）と命名された。日本軍政府は，法令を発行して，売買取引，仕事，学校など日常生活を厳しく監督した。日本が占領した 1942 年当時ラブアンの人口は約 4,000 人と推定され，男性 1 人に 6 ドルの人頭税を課した。いっぽう，教育，保健といった行政サービスは，物資の不足により低下した。食糧など日用品の不足は，輸入を制限されたため厳しい状況になった。ラブアンの経済的生活は，北部ボルネオのほかの町同様，悪化した。

（2）降伏地点 Surrender Point

ラブアン連邦直轄区 Labuan Corporation の公式ウエッブサイトには，歴史的記念碑として，「降伏地点」，「考古学的なぞの「煙突」The ‘CHIMNEY’ an Archaeological Mystery」と「第二次世界大戦メモリアル World War II Memorial」の 3 項目がある。ラブアン島北端にはかつて炭鉱があり，使途不明の煙突が残されている。

ラブアン島の南東にある市街地とは反対側にある北西の「降伏地点」入口には，「降伏地点メモリアル Surrender Point Memorial」の看板がある。中央に記念碑があり，英語だけで「ここで，1945 年 9 月 10 日，オーストラリア帝国軍第 9 軍司令官が，北部ボルネオ日本陸軍第 37 軍の降伏を受け入れた」と書かれている。記念碑の奥の正面には，マレー語と英語で「ラブアン，ブルネイとオーストラリア　1945」のタイトルの下，ボルネオ島とラブアン島周辺の地図，上陸や戦闘シーンとともに，オーストラリア軍が 1945 年 6 月 10 日にラブアン島に上陸，日本軍を掃討して，現地の人びととともに復興に務めたこと，戦後マレーシアとオーストラリアが文化，教育，経済を通じて友好関係を深め，平和な生活を築いていることを説明したブロンズ板をはめこんだ碑がある。両側には，「ラブアンと日本の降伏 Labuan and the Japanese Surrender」「第二次世界大戦中のラブアン Labuan in the

写真 1.　降伏地点（筆者 2016 年 2 月 22 日撮影）

写真 2.　平和公園入口（筆者 2016 年 2 月 22 日撮影）

Second World War」「戦後 The Aftermath」について，マレー語と英語で書かれた説明板がある。

（3）平和公園

「降伏地点」の隣に，「平和公園」がある。アーチ型の入口の外の右に，ラブアン連邦直轄区が立てた説明板に，マレー語，英語，中国語，日本語の 4ヶ国語で，つぎのような説明がある。

> 平和公園（Taman Damai）は，平和を記念して造られたものです。2 つの曲線を描いた半円形の慰霊碑がトロピカルロックガーデンによって囲まれた大きな塚と，パビリオンが公園中心都（ママ）［部］に位置します。すばらしい景色，屋根付きの休息所と静かな池にかかる橋も，平和な場所の特色を醸し出しています。瓩（ママ）［戦］争の危険と恐怖の象徴である碑文が書かれたブロンズ板が，慰霊碑の片方に掛けられています。公園の入り口付近にある石碑にも第二次世界大瓩て（ママ）［戦で］日本が降伏したことが記されています。この公園は 1982 年に日本政府によって造られたものて（ママ）［で］す。

公園内には，いくつかの記念碑がある。入口を入ってすぐ右に，「ラブアン平和公園」について，つぎのような説明書きがマレー語と日本語である。

> 　このラブアン平和公園は　さきの大戦中ボルネオ地域及び海域で戦没されたすべての人びとを慰霊すると共に　世界の恒久平和を祈念し　日本とマレイシア両国の友好親善の広場となることを願って建設されたものである
>
> 　この建設にあたっては　マレイシア国政府　サバ州政府　ラブアン市及び日本政府の協力と特に財団法人日本船舶振興会（会長笹川良一）から多大の補助金の交付を受け　また遺族関係団

体　戦友関係団体　企業等からも格別の援助を得て完成したものである

昭和 59 年 4 月 14 日

建　設　財団法人南太平洋戦没者慰霊協会
会長　竹田恒徳
理事長　植木光教

設　計　株式会社菊竹清訓建築設計事務所

施　工　東洋建設株式会社

後援団体並びに企業（順不同）

財団法人日本船舶振興会
財団法人日本遺族会
日産自動車株式会社
野村証券株式会社
三菱商事株式会社
東京電力株式会社
伊藤忠商事株式会社
株式会社イトーヨーカ堂
神崎製紙株式会社
北ボルネオ戦友団体協議会
独歩ボルネオ三七一会
独歩三六七大隊白鷺会
岡山南友会
第三七軍司令部睦会
第一四気象五中隊戦友会
独歩三七〇大隊タワオ会
第一六野航修廠一油整隊
独立混成二五聯隊戦友会
キナバル会
三七軍防疫給水部戦友会
一一〇飛行場大隊戦友会
独歩第三六八大隊戦友会
独立無線第一一九戦友会
ボルネオ燃料廠戦友の会
独船工一会
ボルネオ南星会
南方第一一陸病院戦友会
第一四七兵站病院戦友会
独歩四三二大隊戦友会
独機関銃二二大隊戦友会
一〇三野戦道路隊戦友会
独歩三六六大隊戦友会

マレー語では，「後援団体並びに企業」名は書かれていない。

「ラブアン平和公園」の説明板の右に花のアーチがあり，それを抜けると「平和塔」と彫られた石碑が中央にある。右に，1976 に社団法人南太平洋友好協会が建てた「平和塔」があり，表に日本語，裏にマレー語と英語でつぎのように書かれているが，この石碑には数ヶ所のひびが入っている。左には，右の石碑と若干違う説明文に「再建　2010 年 8 月　社団法人　アジア南太平洋友好協会　会長　河野太通」を加えた記念碑がある。

この碑は第二次大戦中この地で戦いに斃れていった兵士達，そして共に果てた市民への慰霊とそして永遠の平和への願いをこめて建立されたものである。

この人達の勇気と忠誠心と犠牲とを永く伝え，二度とこの地が再び悲惨な戦いの場とならぬよう人々の願いと祈りをこめて。

1976 年 9 月　社団法人　南太平洋友好協会

会長　山田無文

この「平和塔」の右に，2013年5月18〜19日コタ・キナバルからラブアンまで200キロを，200人のサイクリストが平和を願って走ったことを記念した英語の説明板「平和が一番 PEACE IS THE BEST」がある。

そして，「平和塔」の左奥で，正面入口からまっすぐいったところに「ボルネオ戦没者の碑」があり，つぎのような日本語と英語の，それぞれ長い1行の説明文がある。

> さきの大戦においてボルネオ地域及びその周辺海域で戦没した人々をしのび平和への思いをこめてこの碑を建立する
> IN MEMORY OF ALL THOSE WHO SACRIFICED THEIR LIVES ON LAND AND AT SEA IN AND AROUND BORNEO DURING WORLD WAR II AND IN DEDICATION TO WORLD PEACE
> 昭和57年9月30日竣工　日本国政府　協力　サバ州政府
> CONSTRUCTED BY THE GOVERNMENT OF JAPAN IN COOPERATION WITH THE GOVERNMENT OF SABAH ON 30 SEPTEMBER 1982

この「ボルネオ戦没者の碑」について，厚生労働省のホームページでは，つぎのように紹介されている。

写真3.　日本国政府建立「ボルネオ戦没者の碑」（筆者2016年2月22日撮影）

戦没者慰霊事業：ボルネオ戦没者の碑

1　竣工年月日

　昭和57年9月30日

2　建立地及び面積

建立地：マレーシア　ラブアン市

面　積：約 1,800 m^2（慰霊碑部分，ラブアン平和公園全体では約 34,000 m^2）

3　地域（近海を含む）

ボルネオ島（インドネシア領を除く）（戦没者概数：12,000 名）

4　碑の概要

慰霊碑は，菊竹清訓氏の設計による。

同碑は，マレーシア政府及びサバ州政府の協力を得て，「ラブアン平和公園」の敷地内にボルネオ地域及びその周辺海域で戦没したすべての人々をしのび平和への思いをこめて建立された。

また，慰霊碑は半円形のアーチ状に造られ，その裏側は現地住民の方々が利用するための野外ステージとなっている。

5　碑文

「さきの大戦においてボルネオ地域及びその周辺海域で戦没した人々をしのび平和への思いをこめてこの碑を建立する」

6　維持管理状況

厚生労働省がラブアン市評議会に委託して，慰霊碑の掃除，敷地内の除草，周辺植栽の伐採，巡回などを行っている。

この「ボルネオ戦没者の碑」の前には，表裏にそれぞれ日本語と英語で，つぎのような「注意書き」がある。

この地域は毎年この場所を訪問する日本人にとって大切な場所です。お立ち寄［り］の方はご配慮願います。禁止事項：×墓地に座ること　×ゴミを捨てること　×遊戯　×ペット　許可事項：✓ジョギング　✓献花

また，この「平和公園」について，「ラブアン平和慰霊公苑」として，公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会のホームページで，つぎのように紹介している。

ラブアン平和慰霊公苑

施　設　慰霊塔（政府・厚生省建立）
　　池，遊歩道，公衆便所，
　　水上ステージと観覧
　　休憩所（あずまや）

所在地　マレーシア連邦サバ州
　　ラブアン島（北ボルネオ）

面　積　38,000 m^2

完成日　昭和 59 年 4 月

設計者　菊竹請［清］訓建設設計事務所
施行者　東洋建設株式会社
総工費　約1億3千万円

政府厚生省挨拶

このたびラブアン平和公苑が完成し財団法人南太平洋戦没者慰霊協会から
サバ州政府に当公苑が贈呈されますことは日本国政府及び
国民として誠に慶びに堪えないところであります。
当公苑は，過去の不幸な戦争における犠牲者の方々の
慰霊を通して恒久の平和を祈念するとともに
日本とマレーシア両国の友好と親善を一層深めることを
願って建設されたものであります。

当公苑は南太平洋戦没者慰霊協会によって建設され設計は，
わが国建設界有数な建築家の菊竹請（ママ）［清］訓先生であり施行は優れた業績を有する
東洋建設株式会社の手によるものであります。当公苑の完成にいたる道程は
平易なものではなく両国政府機関並びに民間各方面の方々の多大な努力が積み重ねられました。

特にマレーシア国サバ州政府ハリス主席大臣閣下はじめ同国政府関係者並びに
ラブアン市当局の深い御理解と多大な御協力を得たこと，
当公苑の建設者である南太平洋戦没者慰霊協会におかれては，
幾多の困難を乗り越えて心血を注いで事業を完遂されたこと，
当公苑の建設資金の調達に当っては，日本船舶振興会笹川良一会長から
多大な補助金の交付を受けるとともに日本遺族会北ボルネオ各戦友会，
菊竹請（ママ）［清］訓建築設計事務所，東洋建設株式会社及び諸企業から格別の援助を得たことは，
この公苑の建設に関し，私どもの心に深く銘記されるべきことであります。

そしてこの公苑建設は文字どおり官民一体の大事業でありました。
ここに両国政府関係機関並びに民間各位の御努力と善意のご協力に対して
深く感謝の意を表するとともに平和な海に面したラブアン島の美しい海岸に
建設されたこのラブアン平和公苑が末永く日本とマレーシア両国の友好と
親善の絆となることをお祈りして私のご挨拶といたします。
有難うございました。

昭和五十九年四月十四日
厚生省援護局庶務課長　加藤　栄一

ハリス主席大臣スピーチ（訳文）

植木　光教先生

小嶋　俊宏領事

御臨席の皆様

先ず初めに，この式典に出席されるため日本よりサバにお越し下さった植木先生はじめ，
一行の皆様に衷心より歓迎の意を表明申し上げます。

皆様の御来訪とラブアンのこの地における簡素ながら象徴的な平和公苑贈呈式は，
現行の日本とマレーシア国民の友好関係をさらに増進するものです。
私は，日本政府がこの度強力な使節団を派遣することにより，
この平和公苑はかかる重要性を付与して下さったことを心強く思うものであります。

南太平洋戦没者慰霊協会は，ボルネオにおける先の大戦のすべての犠牲者を
慰霊するためのこの平和公苑建設の施行主であります。
平和公苑が完成を見たことは慰霊協会の弛まぬ御尽力と多大な御貢献によるところ大であったと信じます。
この機会に平和公苑を立派に完成された慰霊協会に対して祝意を表します。

皆様もおそらくお聞き及びのことと存じますが，
ラブアン島が連邦領に編成されるこの時期に平和公苑が完成し，
サバ州政府に贈与する式典が行われますことは，誠に時宜を得たことと申せましょう。
この公苑は二日間だけサバ州政府の管轄下に入りますが，その後，連邦政府に移管されます。

連邦移管後においても，この平和公苑の存在は，
マレーシアと日本国民の友好の絆を強化し相互の協力精神をさらに高めるものと信じます。
このことは連邦首相の唱導を象徴する日本にならえという政策に一致するものです。
又，この平和公苑が両国の密接な関係と両国民の親善を
象徴する普及の記念碑となることを信じてやみません。
ひとえに慰霊協会の熱心な御努力の賜物と存じます。

公苑は花壇と記念碑からなり，面積は 10 エイカーに及びますが，
ラヤンラヤンガツ地区のサレンダーポイントにあって，
のどかな美しい景色は旅行者にとっては観光の地となり，
住民にとっては憩いの場になることと存じます。

サバ州政府及び州民を代表し，このような思慮深い貴重な贈り物をサバ州並びに
マレーシアの国民に送って下さった慰霊協会に対し感謝申し上げたいと思います。

（4）第二次世界大戦メモリアル

市街地から3キロほど北東にイギリス連邦戦没者墓地委員会 The Commonwealth War Graves Commission が維持管理するラブアン戦没者墓地 Labuan War Cemetery とラブアン慰霊塔 The Labuan Memorial などからなる第二次世界大戦メモリアル World War II Memorial がある。入口の外に，マレー語，英語，中国語，日本語の4ヶ国語で，つぎのような「ラブアン慰霊碑」の説明がある。

> タンジユン・バシー通りにあるラブアン慰霊塔には，第二次世界大戦中にボルネオで戦い，戦死した3,905人の連合軍兵士が眠つています。中には捕虜となつて死んだ人達もいます。ここに埋葬されている人の多くは，オーストラリア人とイギリス人です。残りはブンジヤビ・シグナル・コープのインド人やニユージーランド人，マレーシア人です。ここには多くの悲痛なメツセージが家族から寄せられています。神のみ知るという一言だけ書かれているものもあります。慰霊塔は手厚く管理されている公園内に整然と建つています。埋葬されている兵士の名前は訪れる人にわかるようにパネルに掲げられています。この慰霊塔は，連邦戦碑委員会によつて建設・管理されています。

入口を入ると，コの字型に2列に並んだ柱廊があり，それぞれの柱廊には戦没者の名前がある。その向こうに十字の慰霊塔があり，両側に遺族のメッセージが添えられた個々の戦死者の名前の入ったプレートが並んでいる。右奥には，インド人兵士を追悼する慰霊塔がある。

入口近くに，ボルネオ島の地図を中央に，左に英語，右にマレー語で「ボルネオでの戦争，1941–1945」「ラブアン戦没者墓地」「ラブアン慰霊塔」について書かれた説明板がある。「ラブアン戦没者墓地」の説明は，つぎの通りである。

写真4.　ラブアン慰霊塔・戦没者墓地（筆者2016年2月22日撮影）

この墓地には，戦闘や捕虜になってボルネオで死亡した者の墓が集められている。ここに埋葬されている 3,908 体のうち，半分以上の身元確認ができていない。確認できた 1,752 体の内訳は，水兵 5，兵士 1,523，航空兵 220 と市民 4 で，イギリス人 814，オーストラリア人 858，ニュージーランド人 1，インド人 43，マレー人 36 である。
インド人兵士 34 体は火葬され，インド軍プロットで追悼されている。

「ラブアン慰霊塔」の説明文は，つぎの通りである。

この慰霊塔は，オーストラリア陸軍・空軍，現地軍に所属し，ボルネオ解放作戦で戦死した兵士，あるいはボルネオやフィリピンで捕虜となって死亡した兵士で，墓のないものを追悼している。このなかには，オーストラリア陸軍に所属していたオーストラリア兵 2,207，イギリス兵 1，ニュージーランド兵 3，オーストラリア航空兵 51，北部ボルネオ・ブルネイ・サラワクの現地軍兵士 65 が含まれている。この慰霊塔で追悼されているもののなかに，この墓地で身元不明として埋葬されているものが少なからずあることは疑いない。

この敷地の外には，つぎのような注意書きが，マレー語，英語，中国語の 3ヶ国語である。

この墓地は，ここに埋葬されている霊にとって神聖な場所です。みだりに騒音をたてたり，ゲームをしたり，ジョギングしたり，この聖地にふさわしくない行為をしないでください。

〈むすびにかえて〉

ラブアンの人びとは，日本と連合軍（アメリカ，イギリス，オーストラリアなど）との戦争に巻き込まれ，市街地を破壊され，生活苦に苦しんだことが，ラブアン博物館の展示からわかる。そして，その双方が戦争犠牲者を慰霊する公園を戦後建設した。ラブアン市はともに観光施設として地図に載せているが，公式ウェッブサイトではオーストラリアゆかりの「降伏地点」，イギリスゆかりの「第二次世界大戦メモリアル」はあっても，日本ゆかりの「平和公園」の紹介はない。「降伏地点」は写真と説明文だけだが，「第二次世界大戦メモリアル」は写真と説明文に加えて，毎年 11 月第一日曜日のリメンブランス・デーRemembrance Day[3] におこなわれる式典の映像を流している。説明文には，連合軍の上陸が迫っていた 1945 年にサンダカン捕虜収容所から西にあるラナウ Ranau まで捕虜に「死の行進」をさせ，何百という死者を出したことが記されている。サンダカン捕虜収容所にいた 2,400 名の捕虜のうち 1,294 人が，3 度の「サンダカン死の行進」または「ラナウ死の行進」の犠牲になり，1,100 人が捕虜収容所で死亡し，わずか 6 人が生き残った。6 人のうち 2 人は 2 度目の「死の行進」中に抜けだし，4 人はラナウ捕虜収容所から脱走した。捕虜の多くは，シンガポールから連れてこられたイギリス人やオーストラリア人だった［Ooi 2011: 91–98; 上東 2003］。

ラブアン島は，「平和公園」寄贈式がおこなわれた 1984 年 4 月 14 日の翌日までサバ州に属し，16 日に連邦直轄領になった。アピ事件で 176 名が処刑された 1 月 21 日には，サバ州政府主催で毎年慰霊祭がおこなわれ，新聞やテレビで報じられている［上東 2002: 211］。アピ事件と捕虜の「死の行進」

などによって，日本軍政は地域の住民にけっしていいイメージを残していない。

いっぽう日本側では，アピ事件や捕虜「死の行進」を意識した言動はまったくみえない。「平和公園」は，すべての戦争犠牲者の慰霊と今後の友好が目的で，「謝罪」や現地への影響をあらわすものはなにもない。入口にあるラブアン政府が建てた説明板にある「日本が降伏した」事実は書かれていないし，「この公園は1982年に日本政府によって造られた」というのも正確ではない。日本政府が造ったのは，「ボルネオ戦没者の碑」だけで，公園は1984年に財団法人南太平洋戦没者慰霊協会が，「財団法人日本船舶振興会（会長笹川良一）から多大な補助金の交付を受け」て完成したものである。南太平洋戦没者慰霊協会（現公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会）は1966年に慰霊事業を主たる目的として設立され，84年当時の会長，竹田恒徳は旧皇族（竹田宮，1947年皇籍離脱）で，最終階級は陸軍中佐であった。協会ホームページにある「政府厚生省挨拶」の「当公苑の完成にいたる道程は平易なものではなく両国政府機関並びに民間各方面の方々の多大な努力が積み重ねられました」「幾多の困難を乗り越えて心血を注いで事業を完遂された」と2度言及していることから，紆余曲折があったことが想像されるが，実際にボルネオ本島内に建立される予定が，サバ州住民の感情を刺激する雰囲気があったため，棚上げ状態がつづいた後，当時同じサバ州の一部であったラブアン島に決まった。サバ州政府が1979年にアピ事件の犠牲者を慰霊する公園を整備したことと関係しているものと思われる。また，1976年に建てられた「平和塔」の数ヶ所のひびは，倒壊されたものを修復したように見える。「ラブアン平和公園」の慰霊の対象を日本軍戦没者のみではなく，「ボルネオ地域及びその周辺海域で戦没したすべての人々」としたのも，そういった経緯からだったと考えられる［上東2001: 248］。

それだからこそ，気になるのが，政府建立の「ボルネオ戦没者の碑」の前にある「注意書き」である。日本語と英語だけで，マレー語のない「この地域は毎年この場所を訪問する日本人にとって大切な場所です。お立ち寄［り］の方はご配慮願います」という記述から，この公園が日本人のためにあることがわかる。このような注意書きは，第二次世界大戦メモリアルにもあり，マレー語，英語，中国語で書かれたものは，人類が共通にもつべき「埋葬されている霊」への礼節である。だが，「平和公園」の注意書きは，死者にたいするものではなく，「訪問する日本人」のためである。死者にたいする慰霊は，国籍，宗教などを問わず，理解しあえるものである。ラブアン戦没者墓地では，慰霊の対象がはっきり明記されているのに，日本側では明記されていない。日本政府が慰霊の対象としたのは，近海を含むボルネオ島（インドネシア領を除く）における戦没者数12,000名だけで，地元と合意したはずの日本人以外の者は含まれていないのでないかと思えてくる[4]。日本政府が期待した慰霊碑の裏側にある野外ステージなどは，「現地住民の方々」に利用されているのだろうか。人びとがあまり訪れることのない市街地から離れた場所にあるので利用もしにくいだろうし，「訪問する日本人」の慰霊活動を見ることもないだろう。すくなくとも，ラブアン政府の公式ウェッブサイトでは，「住民にとっては憩いの場になる」どころか，その存在さえ紹介されていない。

戦後の和解の場としては，敵味方双方が同じ場を訪れ，敵味方なく戦死者を慰霊し，平和を祈ることが基本であるが，ラブアン島ではすれ違ったままである。平和公園ができた1984年の1人当たりの名目国内総生産GDP（USドル）は日本の10,784にたいして，マレーシアは2,386だった（2014年は日本36,156，マレーシア11,050）［国際通貨基金IMF http://www.imf.org/external/ns/cs.aspx?id

＝28 2016 年 5 月 24 日閲覧］。日本のマレーシアへの有償資金協力は 210 億円だった［外務省 http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki/kuni/j_90sbefore/901-10.htm　2016 年 5 月 24 日閲覧］。この経済格差によって 1984 年当時の日本がマレーシアの国民感情に鈍感になっていたのなら，今日経済格差が縮まったからではなく，本来あるべき対等な国家同士としての今後の交流を見据えていかなければならない。

参考文献

太田恒彌『赤道従軍』富士書店，1943 年。

外務省通商局「英領ラブアン島」（在バタビヤ領事　染谷成章）『移民調査報告　第五』1910 年。

上東輝夫『東マレイシア概説―サバ・サラワク・ラブアン』同文舘，1999 年。

上東輝夫「東マレイシア地域の日本人墓地の現状と史的考証」*NUCB Journal of Economics and Managenient*（名古屋商科大学），Vol. 45, No. 2（March 2001），pp. 241–50.

上東輝夫「日本軍政期の北ボルネオにおけるアピ事件について」*NUCB Journal of Economics and Information Science*（名古屋商科大学），Vol. 47, No. 1（July 2002），pp. 207–13.

上東輝夫「太平洋戦争期の北ボルネオにおける英・豪軍捕虜の「死の行進」について」*NUCB Journal of Economics and Information Science*（名古屋商科大学），Vol. 47, No. 2（March 2003），pp. 345–52.

公益財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会　http://homepage3.nifty.com/pwm/index.html（2016 年 3 月 3 日閲覧）

厚生労働省「ボルネオ戦没者の碑」　http://www.mhlw.go.jp/bunya/engo/seido01/ireihi07.html（2016 年 3 月 3 日閲覧）

国立公文書館アジア歴史資料センター「ラブアン」関係史料　http://www.jacar.go.jp/（2016 年 3 月 3 日閲覧）

藤原稜三『落日のラブアン島』創造，1975 年。

三穂五郎『邦人新発展地としての北ボルネオ』東京堂書店，1916 年。

望月雅彦「アピ事件の真相―故大穂益夫氏の手記―」『軍事史学』第 31 巻第 3 号（1995 年 12 月），53–61 頁。

Commonwealth War Graves Commission, Labuan Memorial　http://www.cwgc.org/find-a-cemetery/cemetery/2055400/LABUAN%20MEMORIAL（2016 年 3 月 3 日閲覧）

Labuan Corporation, Official Website　http://www.pl.gov.my/en/web/guest/tugu-penyerahan-jepun1（2016 年 3 月 3 日閲覧）

Labuan Museum　http://www.jmm.gov.my/en/museum/labuan-museum（2016 年 3 月 3 日閲覧）

Ooi, Keat Gin, *The Japanese Occupation of Borneo, 1941–1945*, London & New York: Routledge, 2011.

Saba Tourism Board Official Website http://www.sabahtourism.com/destination/petagas-war-memorial（2016 年 8 月 25 日閲覧）

註

[1] 1941 年 12 月 20 日に占領したなどと書かれているものがあるが，占領した川口支隊司令部「状況報告書」（［1942 年］2 月 19 日）（アジア歴史資料センター C14060063100）によると，「ブルネイ（ブルネイ）英領」の占領月日 1941 年 12 月 31 日の翌日 1942 年 1 月 1 日に「ラブアン島（英領）」となっている。このとき従軍していた同盟通信社特派員太田恒彌は，つぎのような記事を送っている。なお，奥付では著者名が太田恒也（つねなり）となっているが間違いで，著者は戦後同盟通信社が解散した後，時事通信社に入社している［太田 1943: 111–13］。

〔ラブアン島ヴイクトリア・タウンにて一月一日発〕戦勝に明けた一月元日の夜，ボルネオに作戦中の皇軍の一部隊は，○○部隊長陣頭指揮のもとに，要衝ラブアン島を急襲してこれを無血占領し，大東亜戦争第二年度の初戦果を挙げた。ラブアン島は，英領北（ノース）ボルネオとブルネー王国の境をなすブルネー湾頭に浮ぶ五十平方マイルほどの小島ではあるが，香港，シンガポール間の海底電信線はこの島に陸揚げ中継され，またこの島のヴイクトリア・タウンの港は二千トン級の汽船を横付けにする良港で英領北（ノース）ボルネオ，ブルネーの各港への貨物は，ここで小船に積みかへて輸送されるといふ通信，交通上の要地で，この島占領の意義は大きい。

一月一日〇時，〇隻の舟艇に分乗した皇軍部隊は勇躍〇〇を出発，ブルネー湾の波を蹴つて進航した。二十時ごろ，ラブアン島南部のヴイクトリア・タウンの沖合に到達したころはすでに夜陰が海上を包み，低い台地形の島が，ボンヤリと前面に浮んで見えた。島の手前の小島にある灯台四つは，いづれも灯火を消し，ラブアン島も完全に灯火管制を行つてゐる。船のエンヂンの音だけが，あたりの沈黙をかすかに破つてゐる。二十時四十分，敵側に全く反響のない無気味ななかを，部隊は大胆にも正面埠頭から上陸を敢行，またたく間に，政庁，警察庁，海底電信所，無線電信所を占領した。港に臨んだ商店街にある高い塔の時計が闇のなかで無心に二十一時（ボルネオ時間二十時）を打つたころには，ラブアン島は皇軍の全き制圧下にあり，英人の理事官，海底電信所長，水道電気技師および支那人の巡警隊長らは，すべて抑留されてゐた。間もなく，ヴイクトリア・タウンは灯火をとりもどし，開戦以来の眠られぬ恐怖から解放されたが，政庁の理事官室の電灯の下には，一九四二年の日記帳が一月一日のペーヂも全く空白のまゝ横つてゐた。

[2] つぎのような説明文のあるブロンズ板の写真がラブアン博物館に展示されている。この「前田島由未碑」は，ラブアン島中心街にある「ラブアン・ホテル前に建立されている」（2016 年現在のラブアン・ホテルについては不明）［上東 2001: 248］。

THIS MEMORIAL COMMEMORATES GENERAL MAIDA COMMANDER IN CHIEF OF THE WARTIME JAPANESE FORCES IN BRITISH BORNEO WHO WAS KILLED IN AN AIRCRASH AT BINTULU ON 5TH SEPTEMBER 1942 WHEN EN ROUTE TO LABUAN TO OPEN THE AIRFIELD HERE ON 9TH DECEMBER 1942 LABUAN WAS NAMED MAIDA ISLAND BY THE JAPANESE GOVERNMENT THE MEMORIAL WAS MADE BY ORDER OF GENERAL TOJO WHO PASSED THROUGH LABUAN IN JUNE 1942

[3] 1918 年 11 月 11 日の第一次世界大戦終結の日にちなんで，イギリスで定められた記念日。毎年，この日の前後にイギリス連邦諸国などで戦没者追悼行事がおこなわれている。

[4] ラブアン島には「戦没日本人の碑」と書かれた石碑 1 基と墓標 3 基，埋葬跡 5ヶ所を含む日本人墓地があったが，1977 年の補修工事後まもなく移転計画がおこり，82 年に植物園内に移転した［上東 2001: 245］。2016 年現在，7 基が確認できる。右奥の日本式墓石は正面にはっきりと「南無阿彌陀佛」と読めるが，裏ははっきりせずかろうじて「熊本」「天草」の文字が読みとれる。左の木の墓標にはなにも書かれていない。手前の 5 つのうちいちばん左のものは枠だけでなにも書かれていないが，残りの 4 つは右から「柴田信知　1970　82 才」「一九六五年九月　嶋田サミ女　七拾八才」「成立垣墓　1954 年」「成立垣墓　妣横山ツキ女孺人神　1954 年 4 月」の文字が読みとれる。からゆきさんのものと思われる。1914 年 5 月 12 日に，ラブアン島を訪ねた三穂五郎は，「日本人は雑貨店一軒，珈琲店一軒，醜業屋一軒，ラシヤメン一名，支那人の妾になつて居るもの一名合計男二名女十名である」と記している［三穂 1916: 7］。42 年 1 月 1 日の日本軍による占領時にいた日本人は「雑貨商の芝田氏一家をはじめ，婦人四名」で，「婦人のはうは，六十か七十以上のお年寄りばかりで」，「いづれも十七, 八のとき国を出て，もう四, 五十年，ながい人は，もう六十年も南の国に住みなれてゐる」と説明されている［太田 1943: 115–16］。

写真 5.　ラブアン日本人墓地（筆者 2016 年 2 月 22 日撮影）